

別院しらべ隊

調査報告書No.5 先人達が残した物

受け継がれる意志

旭川別院本堂は大正9年（1920年）に建てられました。当時の本堂設計図を見てみると、大門同様、気仙大工・花輪喜久蔵氏の設計による本堂であることが分かりました。大きさは十五間四面（一面：約27m）と、建設当時、又現在においても北海道最大の木造建築であります。普段何気なくお参りさせていただいている本堂には、どのような意味（願い・はたらき）があるのでしょうか。

本堂には、中心に御本尊である阿弥陀如来を安置し、両脇には親鸞聖人、蓮如上人御絵像、又その両脇には聖徳太子・七高僧、前門首・歴代門首の絵像が安置されています。

本堂を念仏道場ともいい、教えを聞いていく場として、私達は集います。念仏道場に身を置くという事は、私自身が仏や先達の方々からの願いに本当に答えているかということが問われてくる場であり、どう生きて行けばいいかという道を示してくださる場でもあるのです。

教えによって私が私自身の本来あるべき姿に気づかせていただき、生きる力を頂く場としてこの旭川別院本堂は先達の願いによって建てられ、今もなお私達に相続されています。

今回からは、先達の御苦勞によって建立された旭川別院本堂の由来・状況・謎などを調査し皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

『南無阿弥陀仏をとناولば
梵王帝釈帰敬す
諸天善神ことごとく
よるひるつねにまもるなり』

『天神地祇はことごとく
善鬼神となづけたり
これらの善神みなともに
念仏のひとをまもるなり』

（現世利益和讃）

親鸞聖人もご和讃において「諸仏、諸天神等」について、このように表しておられます。

私たちは、真宗のお話を聞くことで、つい他宗や他の佛菩薩、神々は「ちがう、間違っている。」とつい批判してしまわないでしょうか？

親鸞聖人は『念仏成仏是真宗』（私が救われていく教えは念仏だけでした）とっておられるだけで、他宗や他の佛菩薩、神々を否定し嫌ってよろしい、とは言っておられません。

この棟札を見ることによって「あなたは阿弥陀如来の前に座って仏法聴聞という讃嘆供養をしておられますか？」と私自身のあり方を問い正して下さるようでもあります。



次回もお楽しみに

平成22年5月1日制作

調査員：草部・垣原・横井よ・高橋



大工頭

鈴木福右衛門

岩手縣気仙郡盛町

住所 札幌

鈴木直吉

石工

花村真治

青森市寺町

田中木工場屋

旭川

屋根

高網金吉

左官

繩井庄市

旭川

池田仁三

山田清吉

建具

牧田平藏

旭川

石倉彌四郎

大正七年九月貳拾日

旭川

札幌

（発見した棟札裏側）

別院の棟札発見！

旭川別院の棟札はご本尊の真上にあります。その棟札の意味は、寺社・民家など建物の建築・修築の記録・記念として、棟木・梁など建物内部の高所に取り付けられた札で、木の札または銅の板に記して釘で打ち付けます。または建物の部材に直接記されることもあり、これを梁上銘と呼ぶこともあります。趣旨は同じです。

書かれる内容は築造・修理の目的を記した意趣文やその年月日や建築主・大工の名・工事の目的など建築記録ですが、関連して他の事に及ぶものもあります。簡潔なものもあれば、詳細に記されたもの、絵柄が記されたものなど多種多様です。

民家の棟札では、表に「五帝竜神」と「岡象女神」と記されることが多く、どちらも鎮火防火を司る神と言われ、この家が火災などにあう事無く、末長く栄えるようにとの願いを込めて奉られるのです。

棟札は、普段は見えない位置に取り付けられるため、年月が経つとしばしば存在が忘れられてしまいます。そのため今回のように、解体・修理の際に発見されることがあります。

なぜ？この様な形で棟札があるのでしょうか？真宗のお寺ですので「南無阿弥陀仏」と書いてあれば、見た人達は皆が「うんうん」と頷けるはずなのですが…当時の方々がどのように考えられてこの様にされたかは、当時の方から聞けないものですから解りません。しかし、このことはパッと見、あきらかにおかしいと受けとれることです。しかし、なにかそこに先人の表現したい事があるのではないのでしょうか？



奉棟上大元尊神

彦狹知神
手置帆負神
願主輪番 浅野識
設計棟梁 花輪喜久藏
工事監督 永野美光

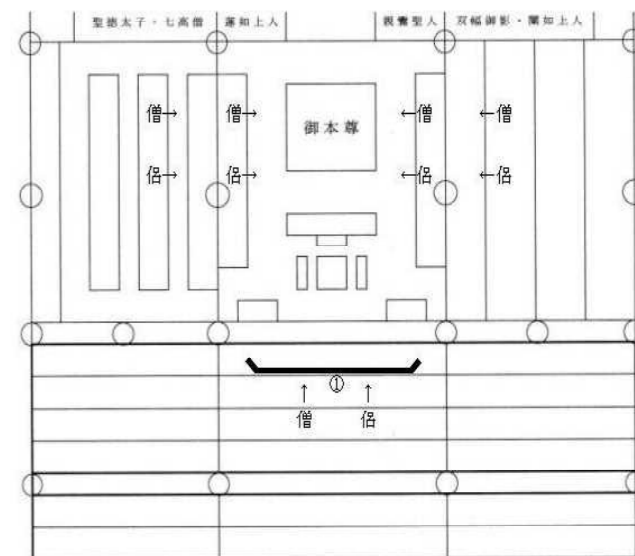
檀家總代
大谷岩太郎
笠原定藏
西村玉三郎
東海林吉四郎
上木彌一郎
山田新吉郎
掛吉右衛門
吉竹鶴吉
後藤重治郎
荒井初重郎
藤井重慶郎
野田舜次郎
浅岡後藤
吉川竹次郎

世話人代表
春日井敏夫
城喜左衛門
吉岡栄太郎
米本栄次郎
赤坂利助
小林嘉次郎
小川竹次郎

(発見した棟札表側)

本堂は阿弥陀如来像を中心として造られています。報恩講等の法要を見ていただければお解りかと思いますが、御本尊を取り囲む形がとられています。

この形は、全ての人が阿弥陀如来を讃嘆供養しておられる様子を表現しています。それが、阿弥陀如来の浄土という世界を表現しているとするならば曼陀羅（中心に居られる仏の世界〔浄土〕観を表現するもの）といっても過言でないと思います。ちなみに、図①のところに座る僧侶は、昔、阿弥陀如来を囲むように座っていました。そういう曼陀羅を立体的に捉えて考えますと、特に奈良時代より盛んになった「本地垂迹」といって、仏様が人々を救うために神の姿となって現れて、共に讃嘆供養なさっておられる形なのではないでしょうか。



また当時は、明治憲法の制定により、天皇は現人神として威光が強かった時代であり、廃仏毀釈運動も盛んになった後であること、本堂再建が一度飢饉によって中断せざる得なくなったという諸々の事情により掲げざる得なかったようでもあります。しかしそれらを踏まえても、今まさに、仏法聴聞の場が開かれている事実を受けとめた場合、諸々の神様もまた阿弥陀如来を囲むように讃嘆供養しておられることを感じていけることと思います。



(ちょうさん曼陀羅)